

---

# 修学旅行

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
修学旅行

【Nコード】  
N13550

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
京都への修学旅行。そこで恋を発展させようとするカップル。だがそれは中々思うようにいかず。学生生活の重要イベントを扱った作品です。

## 第一章

### 修学旅行

修学旅行がはじまった。行く先は京都である。

「清水寺行くんだよな」

「あと平安神宮な」

「それと金閣寺」

「美術館もな」

とにかく色々なものを回るといふのだ。

「まずは全員でそれぞれ回ってそっから自由行動らしいな」

「映画村行くのか？」

「ああ、そこは絶対に行くらしいな」

「それじゃあ戦隊に会えるかな」

皆新幹線の中にいる。その中であれやこれやと話をしているのだ。

「最近毎年あそこで撮影してるからな」

「仮面ライダーの方がいいけれどな」

「ライダーは無理だろ」

「あれっ、一回出ていたぜ」

「そうだよな」

このことも話される。彼等は映画村がとにかく楽しみであるらしい。それが実際に会話の中にも出ていて弾ませてもいるのだった。

「電王でな」

「もっと出て来て欲しいけれどな」

「色々は無理みたいだよな」

「そうだよな」

「まあそれはそれで回れるな」

「映画村一回行って見たかったんだよ」

そんな話をしながら京都に向かう。そんな中でだ。女子生徒の一人が自分の席で難しい顔になっていた。そのうえで言うのである。

「京都に着いたら」

「着いたら?」

「どうするの?」

「あつ、何でもないわ」

だがここではこう言うだけであった。

「別にね」

「別につて」

「どうしたのよ、言葉を止めて」

「言いかけて止めるのはよくないわよ」

「だから何でもないから」

しかし彼女はこう言うのだった。口を波の形にしてだ。

「別にね」

「そうなの、別になの」

「何でもないの?本当に」

「うん、だから気にしないで」

また言う彼女だった。

「それはね」

「だったらいいけれどね」

「私達は」

「ええ。京都かあ」

彼女はまた言った。

「それだったら」

「で、どうするの?」

「何か行きたいところあるの?」

「ええ、それはね」

こう皆に返す。見れば黒い髪をポニーテールにして尖り気味の大きな耳をしている。兔に似た耳だ。目は明るくかまぼこに似ている形をしていて少し上を向いている。口は大きく唇は綺麗なピンクだ。顔は顎がほんの少ししゃくれているが短く可愛い感じだ。背は一六〇程度でほっそりとした身体をしている。その身体を赤いブレザー

と青のネクタイとミニスカートの目立つ制服で包んでいる。ブラウスは白で丁度トリコロールになっている。

彼女の名前を岡山里香という。その彼女が周りに戸惑った顔を見せて対応しているのだ。

「まあ色々」と

「いや、それじゃわからないから」

「京都っていつても広いわよ」

「ええと、まあ」

里香は周りの返答に窮する。しかし咄嗟にこう言ったのだった。

「まあねよね」

「あれって？」

「つまりどうするの？」

「自由時間だけけど」

その時の話をするのだった。

「その時にまあ考えてるけれど」

「考えてるって何を？」

「何考えてるのよ」

「色々」と

返答になっていなかったがこう言ったのだ。

「色々よね」

「それでわかると思うっ？」

「さっぱりわからないけれど」

「どうなのよ、それって」

「わからないかしら」

当の里香は首を傾げさせる。とはいっても彼女は本当にわかっていない。これは否定できなかったし疑いようのないことであった。

## 第二章

「これで」

「どうしてわかれっていうのよ」

「それによ。自由時間だったね」

「グループ行動だから」

「えっ、そうなの」

それを言われて驚く里香だった。新幹線の中で思わず驚きの声をあげる。

「そうだったの！？グループ行動だったの」

「いや、それ最初から言ってるし」

「聞いてないの？それ」

「修学旅行のしおりにも書いてあるでしょ」

「そういえば確か」

言われてそれに気付くのがだった。ようやくだった。

「書いてあったような」

「いや、書いてあったし」

「それどうして覚えてないのよ」

「っていうか読んでなかったでしょ」

「一応読んだわよ」

それは言う。あやふやな感じの言葉で。

「ただ。そうだったの」

「私達の班だからね」

「宜しくね」

周りから五人程出て来て言ってきた。

「それじゃあね。自由時間は一緒だからね」

「わかったわね」

「何だ、二人きりになれないの」

里香は周りの言葉を聞いてがっかりとした顔になって呟いた。

「折角だつて思つたのに」

「いや、それはないから」

「絶対につて」

「今何て言つたのよ」

「そうよ、今何て言つたのよ」

周りはこちらで一斉に彼女に突つ込みを入れた。

「何か凄いいこと言わなかつた!？」

「二人とか何とか」

「言わなかつた？」

「あつ、何でもないわ」

自分でも失言に気付いた。それで咄嗟に誤魔化したのである。

「何でもないから」

「ああ、そうなの」

「何だと思つてたけれどね」

「何でもなかつたの」

「そうそう、何でもないから」

顔に汗を流しながら述べた。新幹線の中は適度な温度で普通ならば汗をかく筈がない。しかしそれでも今彼女は明らかに汗をかいていた。

そのうえでだ。また言うのであつた。

「気にしないで」

「気にしなくていいのね」

「まあそういうことにしておいてあげるわ」

「かなり怪しいけれど」

「別に怪しくはないから」

強引にそうすることにしたのだった。

「気にしない気にしない」

「そうね。とにかく修学旅行」

「一生に一度の修学旅行」

「気合入れて楽しむわよ」

「いいわね」

こんな話をしながら京都に向かう。そしてそれは彼女達だけではない。男組もだ。彼等は京都駅にそろそろと降りながらあれこれと話をしている。

「さて、じゃあこれからな」

「派手に楽しもうな」

「京都な。飯まずいんだったか？」

「高いと美味いんだよ、ここは」

それが京都である。この辺りは大阪とは違う。

「じゃあ映画村で菓子食うか？」

「おい、八橋買って食わないか？」

「草団子とかいいよな」

「そうだよな」

「なあ山本」

そしてここで二重の綺麗な目をした中性的な少年に声がかけられた。黒い髪に少し茶がけられている。口元も目鼻立ちも優しくその顔はまさに女の子のものだった。背は一七〇を少し超えていて優男の身体をしている。青い詰襟の制服の彼に周りが声をかけてきたのだ。

### 第三章

「雄大よ」

「自由時間何処に行くんだ？」

「ええと、金閣寺かな」

その少年雄大は周りの問いにまずはこう返した。

「そこはどうか」

「金閣寺か」

「つてそこ皆で行くぜ」

「だから別にいいんじゃない？」

「あそこは一回行ったらいいだろ」

それぞれこう話すのだった。

「それより四条行かないか？」

「四条大通り」

「そこに行かないか？」

「あつ、そこいいね」

雄大は周りの話を聞いて頷いた。

「そこだとお土産も買えるし。それに」

「それに？」

「何があるんだよ、それで」

「うん、二人きりになれるかも」

こんなことも言う彼だった。

「ひよつとしたら」

「二人きり？」

「何だそりゃ」

周りは今の二人という言葉に反応した。

「俺達六人だぜ」

「二人じゃねえぜ」

「おい、何だよそれって」

「あつ、いや」

周りに言われてだった。ここで気付いたのだった。

「何でもないよ」

「何でもないのか？」

「本当か？」

「うん、何でもないから」

こう言つて誤魔化すのだった。

「気にしないでいいよ」

「そうか。それならいいけれどな」

「それじゃあ今は」

「そうだよ、折角の京都だからな」

「楽しもうぜ」

「軽井沢と京都は来たら楽しむ」

軽井沢については若い女の子の観光地となっていることを嘆いている元政治家の男がいた。この男は何の芸のなさと不見識を露わにさせて政治家を自ら辞めることになったがこの男はかつて自らが私物化している番組においてこれを言っていたのだ。軽井沢が観光地であつて悪いという話はあくまでこの男の手前勝手な脳内妄想ではない。だがテレビという狭い世界の中で思い上がったこの男にはわからなかつたのだ。こうした下劣にして破廉恥な輩が大手を振つて歩けるといふ怪奇現象が起こるといふのは戦後の日本だけである。

「そういうものだからな」

「最低限のマナーは守つてな」

「マナーは守らないとね」

雄大もそれはしつかりと言つ。

「それじゃあね」

「今から行くぜ」

「いいな」

「うん、じゃあ」

こうしてだった。彼等はその京都に降り立った。まずはその日と次の日の前半をかけて京都市内を学校単位で回るのだった。その間雄大も里香も気が気ではなかった。何処か焦った顔でいたのだった。「参ったなあ。これじゃあ」

「一緒になれないじゃない」

それぞれその顔で呟いていた。

「このままじゃどうしたらいいんだろう」

「会えないとかなったらどうしよう」

しかし周りは二人のそんな心配には全く気付かない、皆それぞれ京都の観光名所を次々と回っていく。そうして満面の笑顔であった。

「金閣寺ってあれだよな。一休さんの將軍様の」

「ああ、足利義満な」

「あの人が建てたんだよな」

「そうそう」

その金色のみらびやかな寺院を見て笑顔で言う。前の池にその姿が映りさらに美しい。後ろにある緑も実に綺麗なものである。

## 第四章

「年がら年中仕事もしないでな」

「子供とムキになって遊んでな」

「せこい商人と一緒になつてな」

実際にそのアニメの中ではそうした將軍様であった。

「つていつかの將軍様公家にしか見えないよな」

「そうだよな。本当に仕事しないしな」

「遊んでばかりだしな」

「実際は違うんだろ？」

「いや、あれじゃあ幕府潰れるだろ」

これは普通に想定できることだった。高校生でもだ。

「こんなお寺建てるどころじゃなくな」

「そんなのは無理だよな」

「そうだよな」

「それにしてもな」

その將軍様の話をしながらまた話すのだった。話す内容は金閣寺についてだった。

「綺麗だよな」

「ああ、お池に映ってるのが特にな」

「いいよな」

皆金閣寺を見ること自体を楽しんでいた。しかし二人はここでも気が気でない。困った顔をしてそのうえでその場にいた。そしてそれは一連の京都巡りが終わって夕食から風呂が終わってもだ。雄大は旅館の廊下でほとほと弱り果てた顔になってそのうえで言っていた。

「何時会えるんだろうな、全然チャンスがないよ」

そしてであった。携帯でメールを出す。すぐに返答が来た。

「無理なんだ、向こうはガードが固いんだな」

こう言って溜息をついてだった。そのうえでメールをまた送った。  
『ねえ、明日だけけれど』

『明日？』

メールでのやり取りになった。それをするのだった。

『明日午後四条の大通りに行くけれど』

『私も』

ここでまたメールが返って来た。

『私もなのよ』

『それ本当！？』

それを聞いてだ。雄大はすぐに笑顔になってだ。メールを即座に返した。

『じゃあさ、そこでさ』

『そうね、そこでね』

またメールが来た。

『一緒になれるよね』

『なれるなれる』

メールを打つ手も弾んでいる。

『じゃあそこでね。それでいいよね』

『ええ。ただグループ行動だけれど』

『それでも隙を見て行こうよ』

こう送った。

『少しでも一緒にいたいからさ』

『そうね。だったらね』

『明日そこでね。いましよう』

『うん、それじゃあね』

満面の笑みで入力し終え自分の部屋に戻る。部屋に戻った彼はにやにやとしていた。部屋の皆はそんな彼をこっそり温かい目で見ている。いた。

その日の朝から昼まで里香も上機嫌だった。旅館を出る時は昨日とはまるで別人だった。うきうきとしてそこを出てそうして言うの

である。

「京都っていいわよね」

「そうよね」

「それじゃあね」

「うん、行こう」

その笑顔で皆にも返す。

「楽しい京都旅行にね」

「やれやれ。御機嫌ね」

「げんきんよね」

周りはそんな彼女を見てこっそりと話をする。

「じゃあ今日の午後はね」

「気を利かせてあげようかしら」

「折角だし」

こんな話をこっそりしていたのだった。

そしてだ。午後になり自由時間になった。お昼は弁当をバスの中で食べて済ませた。雄大達はすぐに四条大通りに向かった。その繁華街で賑やかに過ごしていた。

「おい、何買う？」

「木刀買うか？」

「そりゃないだろ」

そんな話をしながら土産もののコーナーを見ながら楽しんでいる。その中で雄大はこっそりとメールを打っている。広い道路を挟んで左右に様々な店が立ち並びビルは高い。そして人が多い。そんな場所である。

その中にいてだ。彼はメールを打ってた。こっそりとある土産ものの店に入った。フラッグなり様々なグッズが売られ並べられている。彼はそこに入ったのだ。

## 第五章

するとそこには里香がいた。彼女は周囲を少し見回してからだ。こっそりと彼の傍に近寄った。そうして土産ものの中に隠れるようにして。彼の手に自分の手を絡めてきた。

そのうえでだ。こっさって来た。

「ねえ」

「うん」

「やっと一緒になれたね」

「そうだね。苦労したよ」

「折角の修学旅行なのに」

それでまた言うのだった。

「中々一緒になれなかったわね」

「全くだよ。自由時間がなさ過ぎるね」

不平に満ちた声だった。どちらもだ。

「もっとあると思ったのに」

「全然ないし」

「ねえ」

里香はその困った顔で雄大に言ってきた。

「どうしようかしら」

「どうしようって？」

「このままずっと二人でいられる時間がなかったら」

彼女が心配しているのはそのことだった。まさにそれだった。

「どうしようかしら」

「それだよ。夜抜け出てこっそりっていうのも」

「難しいし」

「とにかくこんな風になるなんて思わなかったよ」

雄大も困り果てた顔だった。その名前と裏腹にである。

「何とかしたいけれどね」

「できないわよね」

こんな話をしていたらだった。

「おい山本何処だ？」

「何処に行つたんだ？」

店の外から彼を探す声が聞こえてきた。

「まさかはぐれたとかか？」

「迷子かよ、何なんだよ」

そしてだ。探されているのは彼だけではなかった。

里香もだ。彼女を呼ぶ声もしてきたのだった。

「岡つち何処？」

「いないけれど」

「何処に行つたのよ」

「あつ、まずい」

「探してる」

二人はその声を聞いて声をあげた。

「じゃあ早くお店出ないと」

「それもばれないように」

「こつそり会つてるなんてわかつたら」

「何言われるかわからないし」

実は小心な二人だった。

「それじゃあ俺まず出るから」

「私はその後でね」

「うん、そうしよう」

「ええ、じゃあ」

こう話してだった。二人は何とか何でもない風を装って店を出てことなきを得た。そんな二人にとっては厳しい修学旅行であった。

それは次の日も同じだ。それどころか今度は二人は全然別の場所にいた。

「これが銀閣寺か」

「つてまたここに来たのかよ」

「何だかな」

雄大のグループは銀閣寺にいた。そのわびさびの世界を見ている。そして雄大といえはだ。内心ぼやくことしきりだ。銀閣寺のその落ち着いた風情のある美しさも彼の目にはあまり入ってはいなかった。

「折角の修学旅行なのに」

「何だよ山本よ」

「浮かない顔してよ」

「どうしたんだよ。次は南禅寺だし期待しているよ」

「南禅寺に何かあるの？」

一応それを聞くのだった。

「それで」

「あれだよ。石川五右衛門がいたじゃないか」

「絶景かな絶景かなってな」

「後湯豆腐な」

ついでに食べ物も出て来た。

「まあ湯豆腐は高くて食えないけれどな」

「あの山門見られるし」

「折角だから見て楽しもうぜ」

「うん、じゃあ」

それを聞いてまずは頷く彼だった。しかしその表情は晴れないままである。

## 第六章

そしてその顔で銀閣寺のところに行った。そして里香は。

「ああ、ここよね、ここ」

「そうそう、日本橋」

「似合う？これ」

「似合う似合う」

彼女のグループは映画村にいた。そこでロケの場所を見たり時代劇の服を着たりしてだ。それぞれ楽しんでた。町娘の格好をしている娘もいる。

「ねえ岡っちもさ」

「何か着たら？」

「どう？」

「ええと、私は」

しかし気の晴れない彼女は困った顔で皆に返す。

「別に」

「いいからいいから」

「そうそう」

「まずは着替えましょう」

周りはその彼女に対して少し強引に言う。

「いいわね。それじゃあ」

「里香だったら何が似合うかな」

「スタイルいいしくのーとかどう？」

「あっ、いいわねそれ」

「お銀とかね」

そんな話をしているうちに彼女は何時の間にか忍者にさせられていたりした。だが彼女も楽しめないままで映画村の中にいたのだ。た。

そんな状況で修学旅行を過ごしてだ。気付いてみたら終わって

た。結局二人は四条大通りでの店の中以外では二人きりになれなかった。そのまま帰ることになった。

だがここでだ。先生が言った。

「帰りの席は全部自由席だからな」

「じゃあ好きな場所に座っていいんですか」

「それだったら」

「ああ、そうだ」

先生は生徒達に話す。

「車両は決めているがな。好きな場所に座れ」

「よし、じゃあそれで」

「先生感謝しますね」

「感謝していいから行儀よくしているんだぞ」

先生はこのことは注意した。流石にそれは忘れない。

「わかったな」

「はい、わかりました」

「それなら」

こうして皆それぞれ好きな席に座る。そしてだ。

雄大は結局里香と殆ど一緒になれずそのことに頂垂れたままだ。

席を探していた。

見れば何処も埋まって場所がない。それに困っているとだ。

席はあった。二つだけ空いていた。そこに仕方なくといった感じ

で座った。

それで晴れない顔で窓を見ようとした。しかしここで。

「あつ、ここ空いてるの」

「えっ、まさか」

里香がその席に来たのであった。雄大は彼女の姿を見て驚きの声をあげる。

「来たんだ」

「席、空いてるわよね」

「うん、空いてるよ」

それは間違いなかった。彼女に対して答える。

「それじゃあ」

「座らせて」

「うん、どうぞ」

こうしてだった。里香は雄大の隣に座った。二人一緒に座ってだ。そのうえで静かに話をはじめたのだ。

「修学旅行どうだった？」

「この修学旅行ね」

「うん、それ」

雄大が里香に問うていた。まだ新幹線は動きだしてはいない。だが周りにはもう賑やかにお菓子を食べたりトランプをしたりして遊びだしている。

「それだけれど」

「何かね」

里香は少し溜息を出してから述べてきた。

「あつという間だったけれど」

「うん」

「結局殆ど一緒になれなかったわね」

「そうだよね」

「けれどね」

しかしなのだった。

## 第七章

「今一緒になれたわね」

「そうだね。今ね」

「ええ、今」

まさにそうだった。今やっと一緒になれたのである。

「ずっと気が晴れなかったけれどそれでも」

「それでも？」

「今は満足してるわ」

「そうなんだ」

「雄大君はどうなの？」

こっぴどくに顔を向けて問うてきた。

「今はどうなの？」

「そうだね」

彼は一呼吸置いてから里香のその言葉に応えた。

「僕もだよ」

「そう、やっぱりそうなのね」

「やっと一緒になれたからね」

微笑んだ顔を里香に向けての言葉だった。

「だからね」

「そうなの。それでなのね」

「うん、本当にやっただよね」

「全くね。色々あったけれど最後はこうして一緒になれたから」

「いいよね」

「そうよ、いいわ」

里香もにこりと笑っていた。

「最後は一緒になれて」

「いいよね」

「ええ」

雄大の言葉にも頷く。

「じゃあこれから二人で帰ろうか」

「うん、二人でずっとこの席にいきましょう」

「そうだね。ねえ」

雄大から声をかけてきた。

「修学旅行どうだった？」

「楽しかったわ」

里香はそこにこりとした笑みで雄大の言葉に答えた。

「今最高に楽しいものになったわ」

「そうだね。途中やきもきしたけれどね」

「最後はね」

「そうよね。最後さえよかったら」

「じゃあ。最後はずっと一緒にいよう」

里香に顔を向けての言葉だった。

「ずっとね。それでいいよね」

「うん、じゃあね」

こう話してだった。里香はその手をそっと出してきた。そしてそ

の手で。

「あっ……」

「こうしていいわよね」

微笑みになって雄大に問うてきた。

「これ位はいいわよね」

「悪い筈ないじゃない」

「これが雄大の返答だった。

「だってね」

「そう、いいのね」

「うん、それじゃあね」

手と手が重なり合う。里香の手が上から雄大の手を握っていた。

そうしてそのうえでだ。声もまた彼に対して重ねてきているのである。

「こうしてね」

「一緒にいよう」

二人で笑顔で横に並んでいた。二人は今やっと心を重ね合わせる  
ことができた。

そして周りもこっそりそれを見てだ。温かい目で言い合うのだっ  
た。

「やっと一緒になれたな」

「全く。二人共要領悪いんだから」

「それにバレバレだったし」

「本当にね」

実は皆わかっていたのである。

「もう仕草とかでわかるって」

「それで気付いていないって思ってるのがね」

「もう痛いっていうか鈍感っていうか」

「合わせる方が大変だよ」

「下手な演技はできないし」

こう話しながらその二人をこっそりと見る。そして先生もいた。

「まあそう言ってるやいな。最後は気を利かしてやったんだからな」

「先生も粋ですね」

「だから最後は皆自由席ですか」

「ああ。清純な交際なら先生も文句は言わない」

この辺りは学校の先生らしい言葉だった。

「そういうことだからな」

「じゃあ今は二人きりにしてあげましょう」

「そっだよな」

二人で話してであった。そうして。

「俺達は俺達で気楽に」

「楽しみましょう」

こう話して今は二人きりにさせるのだった。やっと一緒になれて  
最高の終幕を楽しんでいる二人をだ。

修学旅行

完

2  
0  
1  
0  
・  
4  
・  
6

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1355o/>

---

修学旅行

2010年10月8日12時12分発行